

モウソウチクなどの竹類

科 属 名：イネ科マダケ属
学 名：*Phyllostachys* spp.
原産地域：中国等*

※モウソウチクは中国原産、マダケやハチクは中国原産説と日本原産説がある

【どんな被害を引き起こすのか】

生態系：在来植物の駆逐・生物多様性の低下

- ・二次林や自然林に侵入し、在来種と競合、駆逐する
- ・密生した竹林の林内は暗く、落葉の堆積が厚いため、他の植物が生育しにくく、林内の植物が減少する

産 業：農作物への被害

- ・イノシシ等の野生動物が潜伏地として利用し、周辺農地における獣害の温床となる

生 活：土砂災害の誘引・景観の悪化

- ・放置され過密になった竹林では、枯死した地下茎が増加し、斜面の不安定化を招く可能性がある
- ・放置された竹林は、林内が暗く、枯れた稈が倒れる等景観を損なう



【モウソウチク】

- ・日本で見られる竹の中では最も大型の竹
- ・節に1個の環がある
- ・稈鞘（竹の皮）は黒紫褐色で外側（背面）に粗毛がある
- ・タケノコは4月頃に出る
- ・若い稈は粉白色を帯びた緑色
- ・高さ25m、太さ25cmに達する

【生育場所】

- ・山腹斜面、林縁、畑地、樹園地、人家の裏山等



【マダケ】

- ・節に2個の環がある
- ・稈は濃緑色で直径15cmに達する

【ハチク】

- ・節に2個の環がある
- ・稈は白い口吻を帯びて白く見え、直径11cmに達する

【特性】

- ・長い地下茎を伸ばして、周囲の林に侵入する
- ・モウソウチクの根茎は地中を長く横走り、根茎の所々から新しい稈（地上茎）を出す
- ・根茎は1年で1～10m程度伸びるといわれている
- ・地下茎の伸長は7月下旬から11月上旬まで継続する
- ・竹類の稈は肥大せず、年輪をつくらない（一度伸長したら太く高く成長しない）
- ・5～6月にかけて葉は黄変して落葉し、新葉が出る

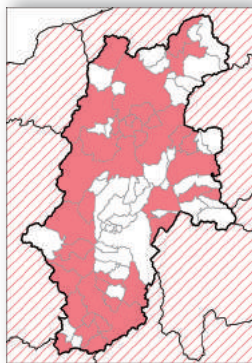
【どこまで広がっているか】

長野県では

- ・県内に広く野生化

全国では

- ・モウソウチクは1736年に中国から鹿児島県に持ち込まれ、観賞用、食用、竹材用として全国で栽培
- ・食材や竹材として利用されていたが、安い外国製品の輸入等により利用が減少し、多くの場所で管理放棄された



2019年現在
■ 定着 ■ 一部地域に定着

世界の分布

- ・世界的に植栽（ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、インド）

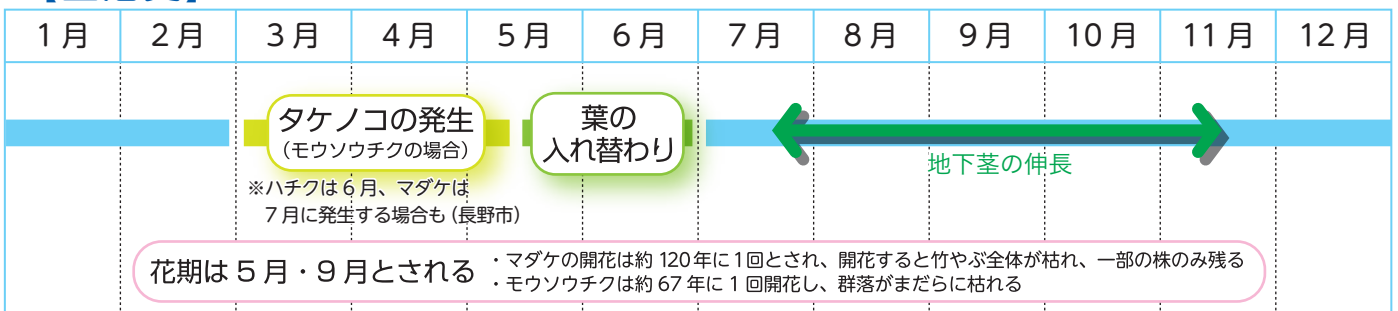
【暮らしの中での利用】

タケノコは食用に供され、稈はカゴや柵、枝は竹ぼうきなどに利用されてきました。また、茶道の道具にも利用され、古くから人の暮らしや文化に役立てられてきました。しかし、プラスチック製品の普及や輸入竹の増加、生産者の高齢化などにより、国内の竹の生産は減少し、多くの竹林は管理されなくなりました。



竹垣

【生活史】



【防除方法】

竹林の適正管理 拡大を防ぐ

竹林は稈の密度を適正に維持することにより、残したい竹林が周囲へ拡大するのを抑制することができる

- 稈の密度を保つため、タケノコ・当年の竹（1年目の真青な竹）の発生と成長を管理する
- タケノコは掘りとりて収穫、または不要な場合は足で蹴って折る等で発生を防ぐ
- 当年の竹はやわらかいため、のこぎり等で伐採する
- 毎年実施する（密度を見ながら）

<適正な稈の密度>

モウソウチク…2m 間隔

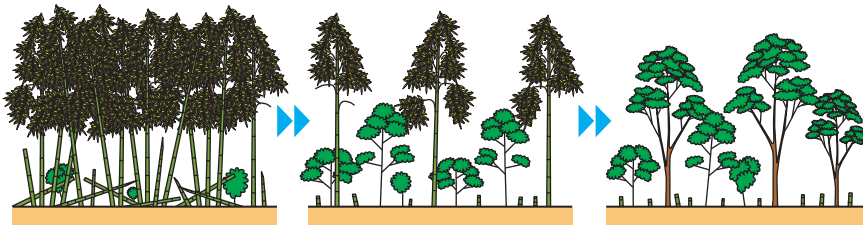
（両腕を広げられる程度）

マダケ、ハチク…1m 間隔

稈の伐採 徐々に弱らせ根絶する

地下茎に蓄えている養分が少ない時期に、光合成する地上部（稈）を伐採し、伐採を繰り返すことで地下茎を弱らせる

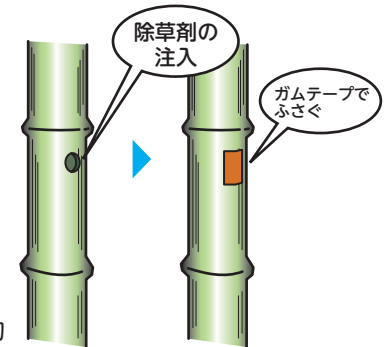
- 対象とする竹の衰退により他の樹種の成長を促進し、小型化した竹を日照不足等の被圧により、枯死させる
※他の広葉樹等の樹種は残し、対象とする竹のみを選択的に伐採する
- チェーンソーやのこぎり、小木の場合は刈払機等により、地際～1m くらいの高さで伐採する
- 地下の養分が少なくなる7～8月に2回程度と秋に1回、複数年繰り返して実施する
※5年以上の継続が必要（皆伐後に広葉樹を植栽し、年2回の伐採を7年間継続してほぼ駆除することができた事例がある）
※12～2月の地上1mの高さでの伐採で、翌年に根まで枯れ、枯れた竹を手で揺らして根ごと掘り出すことができた事例がある
※モウソウチク以外の樹種が生育していない場合は、対象地の立地環境に適した地域由来の樹木を植栽することが望まれる



除草剤 樹勢を弱めて根絶する

除草剤は伐採よりも効果が高いといわれており、除草剤の使用により伐採とくらべて手間とコスト削減が期待できる

- 除草剤は、地下茎がつながっている竹林全体に効果が及ぶため、竹林の一部を残したい場合にその竹林も枯れてしまう可能性があり、注意が必要
※「残したい竹林」か「不要な竹林」かを十分に検討する
- グリホサート系除草剤の原液または2倍希釈液を10ml程度、稈に注入する
- 立っている稈の場合、地上1m程度の節の下2～3cmの箇所（作業しやすい高さでよい）に電動ドリルで穴をあけ、スポイトやシリンジ等で薬剤を注入し、ガムテープ等でふさぐ
- 伐採後の場合は、切株の根元付近に穴をあけて注入する
- 実施時期は、立っている稈の場合は夏～秋、切株の場合は伐採後1ヵ月以内
- 枯れた稈は伐採しづらいため、先に地上1m程度で伐採し除草剤を注入する方が効果的
※除草剤は「登録農薬」^(※1)を使用すること ※水源の周辺や上流では、除草剤は使用しない
※処理した竹には薬剤処理した旨がわかるよう立て札等を設置し、処理した竹から15m以内に発生したタケノコは食べないこと



景観と安全を確保する ～伐採・枯死した稈の除去～

- 伐採した稈や枯死している稈は風で倒れる等の危険があり、荒れた状態は景観を損なう
- のこぎり等で運搬しやすいサイズに玉切りし、林外に持ち出す（伐採作業後等、随時実施する）

【その他の手法について】

- 遮蔽物の埋設（地下茎の拡大・侵入を防ぐ）
 - ・ 竹林の隣接地にタケの地下茎が伸びていくのを阻止するために、境界付近の地中に板を埋設し、地下茎の侵入を阻止する
 - ・ 板はトタンや鉄板、コンクリート製の耐久性の高いものを使用する（根は隙間からも侵入するので、継ぎ目のないものが必要）
 - ・ 板の埋設の際は、深さ50cm以上を地下に埋設し、地上部には地面から10cm程出しておく
 - ・ 長期的な作業の手間やコストは低くなるが、埋設にバックホウ等の重機が必要のため、その時の手間やコストは伐採等より大きくなる

※1：登録農薬…効力、安全性、毒性、残留性等に関する試験成績を提出して審査を受け、行政庁（農林水産大臣）の承諾を取得したもの。登録された農薬は、安全・適正な使用方法が薬剤ごと、対象作物ごとに登録時に決められています。除草剤等の農薬については適切な利用が求められます。